

イエスは洗礼者ヨハネから洗礼を受けた時、神の霊が鳩のように自分の上に降って来るのを見ました。この時、神さまは「イエスこそわたしの愛する子である」と宣言されたのです。その霊が荒れ野へとイエスを導きました。これは神さまの意志でした。悪魔はイエスに三つの誘惑を仕掛けた、と記されています。悪魔はこれらの誘惑によって、イエスをキリストとしての進むべき道から逸らそうとしたのです。「石をパンにしてみる」とか、「神殿の屋根から飛び降りてみる」とか言われても、私たちには誘惑にはなりません。私たちにはそのようなことはできないからです。最初の二つの誘惑は、「神の子なら」という言葉から始まっています。「もしおまえが神の子なら、このようなことはできるはずではないか」と悪魔は誘惑しているのです。イエスはこれらの誘惑を実行することにより、自分は神の子であることを確認できるのです。この「神の子なら」という言葉はイエスの十字架の場面を思い起こします。また、この誘惑はさらに、イエスは神の子なのだから、石をパンに変えて、飢えている人たちにパンを与えてやったらよいではないか、という誘惑でもあります。そうすれば、彼らはイエスが神の子キリストであることを受け入れ、イエスに従う、という誘惑でもあるのです。

イエスは申命記 8:3 の言葉を引用して、この誘惑を退けるのです。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」。この言葉は、パンなど、この世の利益を追及してはならない、神さまの言葉を求めて生きなさい、ということではありません。神さまは私たちにパン、生きるのに必要なもの、を与えてくださる。しかし神さまはそれだけではなく、もっと大きな恵み、神さまの口から出る一つ一つの言葉によって私たちを生かし、導くという恵み、を与えられるということなのです。神さまが私たちに言葉を語りかけてくださり、私たちがそれを聞き、それを信頼し、その言葉に応答して生きる、これが神さまとの交わりなのです。それは、神さまを信頼して、神さまと共に生きることでもあります。イエスは「神の子であることを確かめてみる」という悪魔の誘惑を退けて、神さまへの信頼のうちに神の子キリストとしての道を歩み通したのでした。